

名前：

テレビが世を問、たばかりの時、映画とラジオの必要性を主張しようという意見があったように、インターネットの発明と共に、新聞や雑誌の価値を疑う人も相次いで現れている。しかし、今でも映画館とラジオが人々に愛用されているように、古いものは必ずしも新しいに劣るに及ばず、限りは限り。あらゆるものは必ずそれなりのよさがあり、かけがえのなさを価値があると思う。新聞や雑誌もそうである。新聞や雑誌の一つ目の特徴はその触覚と嗅覚、つまり質感である。朝刊、コートー或は牛乳を飲みながら、新新聞の香りを享受するのは多くの人々にとって、一日の始まりを感じることである。そして、新聞や雑誌をのんびりと読むのも朝からパソコンを使うのより、生きる実感を味わせてくれるのではないだろうか。

それがい、近年にはインターネットの発達につれ、ほぼあらゆる仕事はこれによって片づけられるようになってきた。レポートも書く

と、資料を調べようと、全くインターネットを離れられないと言え。もしニュースを見ることさえパソコンに依頼するのなら、我々はパソコンのとりこに他になんかでもなくなるのではないだろうか。世俗感の重いインターネットに対して、今時新聞や雑誌はかえって仕事からの解放を感じさせてくれると思う。

最後には快適性である。新しい木型パソコンが発明されたとは見え、人の目にとってはあまりに小さく、やはり読みづらい。しかも大きく一般サイズのモニターを伴うように、重くて、そして動かすににくい。それゆえ、視聴者は思うのままに姿勢を変換することができたり。それに対して、新聞や雑誌はそれほど大きく、軽いため、読む時はインターネットの施設に限られるべきです。姿勢も簡単に変えられる。実に便利である。

以上の理由で、私は「これからも、新聞や雑誌は必要だ」と主張するのだ。